

# 探偵小説誕生前夜としてのニューゲイト・ノヴェル ——『オリヴァー・トゥイスト』における二重構造

梶山 秀雄

いわゆる探偵小説史なるものは、ポーを鼻祖として万世一系で受け継がれていく一種の神話である。そして、それ自体が、探偵小説の代名詞である「密室殺人」と相似をなし、ディケンズに代表される19世紀小説を、不純な外部として排除するという特徴を持つ。しかしながら、そのような偏狭な史観を全ての探偵小説史が共有する訳ではなく、ヴァルター・ベンヤミンの先駆的な研究を継承した、社会的、文化的視点からのアプローチも近年盛んに行われている。探偵小説というジャンルが、ポーという天才によって生み出されたというロマン主義的な発想から抜け出して、より包括的に探偵小説というジャンルを位置付けようとする研究者にとって、その生産の条件、および主題的、形式的な発展をたどる際に、19世紀小説は随所にその萌芽を孕んでいるという点で、参照に値するものとなる。例えば、A・E・マーチ (A. E. Murch) は、英国における探偵小説は、当時、隆盛を誇っていた犯罪物語を母体として、警察による犯罪捜査の物語として発生した、という立場を取る (Murch 36-39)。では、探偵小説の先駆けとしての犯罪物語とは、いかなるものであったのか。そして、そこで描かれる犯罪捜査の物語とは。ここでは、その起源時代の有力な証言として、チャールズ・ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』を分析してみることにしよう。

## I

1841年に連載が開始された『バーナビー・ラッジ』とほぼ同時期に発表された『オリヴァー・トゥイスト』は、副題「救貧院生まれの少年の生い立ち」が示すように、18世紀のピカレスク小説、及びそこから派生したビルドゥングスロマンを下敷きとする作品である。また救貧院法に対する抗議が主要なテーマになっていることから、この作品で社会的リアリズム作家としてのディケンズの方法論が確立されたとするのが通例となっている。しかしながら、社会の底辺で蠢く悲劇を克明に描くことで、人間のモラルの重要性を喚起するという当初の目的に反して、読者の目を惹くのは、主人公のオリヴァーよりむしろ、盗賊団の元締めであるボブ・フェイギンや、その仲間のビル・サイクスの悪漢ぶりである。換言するならば、ディケンズが目論見に反して、読者は主人公オリヴァーの運命と同様に、そこに描かれる犯罪に魅せられたという構図がある。そして、この二重構造に識者は敏感に反応したことを示したのが、いわゆるニューゲイト・ノヴェル論争である。

ニューゲイト・ノヴェルとは、1830年代から1840年代の始めに流行したジャンルであり、「罪（主に殺人と強盗）と罰」を主題とした小説群を指す。リチャード・オールティック (Richard D. Altick) は、このカテゴリーに属する作品として、ブルワーの『ポール・クリフォード』(1830年)、『ユージン・アラム』(1832年)、エインズワースの『ルクウィックド』

(1834年)、ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』(1838-39年)、及び『バーナビー・ラッジ』(1841年)、エイズワースの『ジャック・シャパード』(1839-40年)、ブルワーの『夜と朝』(1841年)、及び『ルクレチア』(1846年)を挙げている(Altick 72)。これらの小説は、その名が示すようにニューゲイト絞首台での処刑を扱った物語であり、その元となったのは、18世紀初期に出版され、19世紀を通じて幾度となく編纂増補が行われた『ニューゲイト・カレンダー』である。この「カレンダー」は、ロンドン中心部にあったニューゲイト・プリズンという牢獄に入獄することになった重罪犯が起こした事件や来歴、裁判の経過と結果、処刑の様子、及び犯人の処刑前の懺悔の言葉などで構成された、いわば犯罪者の実録ルポルタージュといったものであるが、これが大衆の血生臭いものを好む嗜好に大いに合致した。ディケンズがデビューしたのは、高価な三巻本が廃れつつあり、雑誌連載、及び分冊形式への移行に伴って、小説の内容もまた変化を迫られた時代であり、『オリヴァー・トゥイスト』が連載されていた『ベントレーズ・ミセラニーズ』も、当時の読者層の拡大に対応して出版された大衆向けの総合雑誌であり、新たな購買層を開拓するために、あの手この手が使われていた。『オリヴァー・トゥイスト』においても、そうした大衆を惹きつける題材のひとつとして、犯罪物語が選ばれていると言ってもいいだろう。<sup>1</sup>

掏摸や故買業、売春といったセンセーショナルな題材を取り上げた『オリヴァー・トゥイスト』は、そうした大衆の欲求に応えるもので、犯罪への支向を助長するとして、発表当時は大いなる非難を浴びることになった。先鋒に立ったのは、ディケンズのライバルとも言えるサッカレーであり、アンチ・ニューゲイト・ノヴェルとも言うべき『キャサリン』(1839-40年)において、『オリヴァー・トゥイスト』は、犯罪者に対して不当な同情心を掻き立てるという批判を行った。

作者の力量は驚くべきもので、読者はただちに彼の虜になり、彼の導くまま、どこへでも彼についてゆかなければならない。しかし、我々はどこへ導かれるか。息もつかずにフェイギンの全犯罪を見守り、親切にもナンシーの過失を悲しみ、ビル・サイクスに対して、ある種の憐れみと尊敬の気持ちを抱き、ドジャーが大好きになってしまうのだ。

それを受けて書かれた1841年版に付された前書きでディケンズは、人々を悪へと駆り立てる気持ちは毛頭なく、逆にそうした悪に翻弄されるオリヴァーが、遍歴の末に遂に真の自己に辿り付くというビルドゥングスロマンが基本的枠組みであることを強調している(“In this spirit, when I wished to show, in little Oliver, the principle of Good Surviving through every adverse circumstance, and triumphing at last”).しかしながら、いかにディケンズが否定しようとも、後の『骨董屋』(1840-41年)のヒロイン、ネルと同様、悪の世界をくぐり抜けていく主人公オリヴァーの運命を物語の推進力としている限り、その純粋な精神を際立たすためには、ロンドンの闇の世界も現実世界と同等の、ことによっては、それ以上の生々しさをもって描かれる必要があり、ディケンズの筆は犯罪者の孤立や絶望を克明に描くあ

まり、その道徳的目的を読者に忘却させてしまうというパラドックスを孕んでしまうのである。

## II

『オリヴァー・トゥイスト』において、ディケンズの中にある道徳観念を示すという理念と、読者の興味をそそるプロットを提示しなければならないという要請の揺らぎが顕著に見られるのが、いささかご都合主義とも言えるオリヴァーと悪の世界の「すれ違い」である。法廷に引きずり出され、3ヶ月の重労働を命ぜられたオリヴァーは気を失い(11章)、目が覚めるとブラウンロウ氏の家で介抱を受けている(12章)。また病気で寝込んでいる間に、プレザーズとダフの追求を免れるといった偶然の一致が、オリヴァーの生来的な性質によって引き起こされるものではないことは言うまでもない。むしろ、我々にとって興味深いのは、すんでのところ悪の世界に取り込まれてしまう危険を回避する筋書きもまた、犯罪社会の克明な描写と同じく、読者を惹きつけるための新聞小説的な発想に由来するものであるということである。例えば、17章の冒頭では、語り手がひょっこり顔を出して、これからの物語の展開について、言わずもがなの釈明をしてしまう。

It is the custom on the stage, in all good murderous melodramas, to present the tragic and the comic scenes, in as regular alternation, as the layers of red and white in a side of streaky bacon. The hero sinks upon his straw bed, weighed down by fetters and misfortunes; in the next scene, his faithful but unconscious squire regales the audience with a comic song.

[.....]

As sudden shifting the scene, and rapid changes of time and place, are not only sanctioned in books by long usage, but are by many considered as the great art of authorship: an author's skill in his craft being, by such critics, chiefly estimated with relation to the dilemmas in which he leaves his characters at the end of every chapter. (118)<sup>2</sup>

前述したオリヴァーの危機が、いずれも週刊連載の切れ目にあたっていることを考えれば、読者の期待を次号まで持続させることに苦心する作者を想像するのは、それほど難しいことではない。連載小説においては、プロットは「続く」という言葉の要求に従って、次号への連続性を保持すると同時に、それぞれの号において単体で読者を満足させることが要求される。すなわち、作者はプロットが要求するところの直線的な語りを阻まれ、場面展開の技を弄して最終的な解決を宙づりにすることを強られる。むろん、ディケンズが述懐しているように、こうしたテクニクは古くから用いられていたのであるが、より顕著になるのが連載小説、あるいは分冊出版という形式であり、そこで作家は見えない大衆を相手にすることを宿命づけられる。このようなジレンマの犠牲者となるのが登場人物であり、オリヴァーは何度も悪の手に落ち、その度に危ういところで救われるという訳である。

ここでポーが『バーナビー・ラッジ』に加えた批判を想起してもよいかも知れない。中心的なプロットに全てが統合されるべきだと主張するポーに対して、ディケンズは「場面転換こそ小説家の腕の見せ所」と言って憚らない。この創作姿勢の相違を単純に出版形式の違いに還元する訳にはいかないが、『オリヴァー・トゥイスト』にも解かれるべき謎が存在しているにも関わらず、それが他のプロットによって薄められ、解決への道が迂回されていることは間違いない。オリヴァーの出生に秘密—モンクスが腹違いの兄であり、ローズは叔母、そしてブラウンロウ氏が父親の友人であった—は、既に物語の前半で示唆されている。運び込まれた家に飾られている女性の肖像画に、オリヴァーは物言いたげな様子を感じ取り（80）、家の主人であるブラウンロウ氏は、オリヴァーと肖像画の女性があまりに似ていることに驚く（82）。しかしながら、その後すぐにオリヴァーは気を失い、最終的にそこに描かれている女性が母親であり、人間関係の全てが明らかになるのは、結末も近い49章になってからである。ここで重要なのは、謎の解明を遅らせるのは、幾度となくオリヴァーを悪の道に引きずり込もうとするフェイギンらの悪のプロットであり、決して謎それ自体の難解さによるものではないということである。読者はオリヴァーの母親が肖像画の女性であることは容易に推察出来るのだが、それがブラウンロウ氏の口から語られ、真実であることが証明されるためには、それを阻害する悪のプロットもまた解決されなくてはならない。言わば、この物語が結末に至るまでには、二重の解決が要求されるのである。

### III

D・A・ミラー（D. A. Miller）が指摘するように、この物語はダブルプロットを要求するものであり、それぞれの解決は警察の公的権力と、その補完機構としての民間人によって執り行われる（Miller 29）。フェイギンら悪人の逮捕、処刑といった「正義」は警察機構によって、オリヴァーを悪の道から救済するという「正義」は、ブラウンロウ氏を始めとする民間人へと弁別され、それぞれが物語の最後に完遂される。こうした位相の異なる解決が、既に見た『オリヴァー・トゥイスト』というテキストの孕む二重性（ニューゲイト・ノヴェル／ビルドゥングスroman）に起因することは言うまでもないが、これはまた当時の警察機構に対する民衆の不信感を表明したものであるとも言えるだろう。厳密に言えば、この小説に登場する警察には、俗にスコットランド・ヤードと呼ばれる首都警察と、その前身としてのボウストリート・ラーナーズが混在しているのだが、どちらも無力な組織として表象されているという点では変わりがないのである。<sup>3</sup>

31章でメイリー夫人宅の泥棒調査にやってきた、「丸顔で目つきの鋭い」プレザーズと、「鼻がいやらしく上を向いていて人相が悪い」（214）ダブは、物々しい様子で家中を捜査し、犯行当時の様子を6回も再演した挙げ句に、酒の供応に預かり、手柄話をして去っていきだけの無能な存在である。もちろん、2人はいかにも怪しいオリヴァーの存在には気づいてはいるのだが、その場の人々の隠蔽工作によって巧みに真実から逸らされていく。「正直にありのままに話そう」という言うローズに対して、外科医ロズバーン氏は次のように語る。

‘The more I think of it,’ said the doctor, ‘the more I see that it will occasion endless trouble and difficulty if we put these men in possession of the boy’s real story. I am certain it will not be believed; and even if they can do nothing to him in the end, still the dragging it forward, and giving publicity to all the doubts that will cast upon it, must interfere, materially with your benevolent plan of rescuing him from misery.’(217)

オリヴァーの「世間の目にさらすには忍びない事情」の先にある「出生の秘密」は、警察官には根本的には解決出来ないデリケートな問題を含んでおり、無能な警察の補完物としてのブラウンロウ氏に代表される民間人によって解かれるべき謎である。こうしたオリヴァーを悪の世界から救済するプロットを担う人々にとって、ボウストリート・ラーナズにオリヴァーが逮捕されるのが好ましくないように、その腹違いの兄であるモンクスが首都警察に捕縛されるという事態もまた、秘密の解明を遠ざけることのように思われる。それ故、ブラウンロウ氏はモンクスを拉致し、法廷で争われる前に、直接その口からオリヴァーの出生の秘密を聞き出そうとするのである（342—48）。

警察と民間人の捜査が分割され、無能な警察を民衆が補完するのは、オリヴァーの救済プロットに限ったことではない。フェイギンたち悪漢の捕縛、処刑といったニューゲイト・ノヴェル的な展開においても、警察は民衆の求める「正義」をむしろ阻害する存在として描かれている。10章で描かれるヒューアンドクライの場面が示すように、群衆は自警の精神というよりも、人間の奥底に潜む「何かを追っかけたいという熱情」（68）に駆られて犯人を追い詰める。普段は抑制していた攻撃性を犯罪者に対しては、存分に向けることを許される民衆にとっては、あくまで法に則って犯人を捕縛し、法廷で裁こうとする警察機構は無能であるだけでなく、障害となるのである。

#### IV

ゲルマン人以来の自警精神、及び狩猟本能に従って、犯罪者を私刑にして共同体の安定を図ろうとする民衆からすれば、周りに人垣を作って助けようとする警察は、フェイギンのみならず、犯罪者の「最も親しい友人」であるかのように映る。フェイギンが貪るように『ポリス・ガゼット』を読んで、定期的な一味の何人かを引き渡すエピソードが示すように、警察は犯罪者と癒着しているように見え、民衆から引き離し、その捕縛のカタルシスを奪ってしまう。50章でフェイギン逮捕の場面をチトリングは、このように述懐している。

‘you should have heard the people groan,’ said Chitling; ‘the officers fought like devils, or they’d have torn him away. He was down once, but they made a ring round him, and fought their way along. You should have seen how he looked about him, all muddy and bleeding,

and clung to them *as if were his dearest friends*. I can see'em now, not able to stand upright with pressing of the mob and dragging him along amongst 'em; I can see the people jumping up, one behind another, and snarling with their teeth and making at him; I can see the blood upon his hair and beard, and hear the cries with which the women worked themselves into the center of crowd at the street corner, and swore they'd tear him heart out!'(emphasis added 368)

群衆のヒューアンドクライの精神は、ニューゲイト・ノヴェルを求める血に飢えた民衆の嗜好と通底するものであり、それは犯人の捕縛—公開処刑という形によってしか解消されえない欲望なのである。おそらくニューゲイト・ノヴェルを求める大衆は、カタルシスの源を二重に持っていたのだらうと思われる。それは自分たちが抑制している攻撃性を開放した犯罪者に密かに惹かれる一方で、その犯罪者の物語が処刑によって終わる、すなわち秩序が安定することによって得られるカタルシスである。ニューゲイト・ノヴェルの形式を選び取ったディケンズは、犯罪者が断頭台の露と消える結末を求める群衆の要求に従って、その狂気に身を委ねてみせる。しかしながら、53章の最後で「夥しい数の見物人が既に集まり、近所の窓という窓は人で鈴なり」(395)であるにも関わらず、おそらくは序文で繰り返し強調された道徳的見地から、肝心のフェイギン処刑の場面がテキストで語られることはない。かろうじて、サイクスが誤って命綱を首に巻き付け、擬似的な絞首刑に処されるのを群衆は目にするのが出来るのみである。サイクス追跡劇の途中で、群衆の一人は警官に向かって怒鳴るのだ。あいつを撃ち殺せ、と (372)

ニューゲイト・ノヴェルの流行は、1830年代から1840年代の初めのごく短い期間に限られている。その終焉の理由に挙げられるのが、無能で無力な存在として表象されてきた警察官のイメージの変化である。内務大臣ロバート・ピール卿の「警察法案 (The Metropolitan Police Act)」によって成立した首都警察は、当初こそヒューアンドクライの精神を重んじる民衆に猛反発を食らったが、次第に法の番人としての評価を高めていく。この有能な警察官というイメージを確立するのに一役買ったのが、チャールズ・ディケンズその人である。1842年に設立された犯罪捜査専門の刑事部に肩入れしたディケンズは、多くのプロパガンダ的なルポタージュを書き、優れた法と正義の代理人として、やがて『荒涼館』のバケット警部という登場人物を創造するに至る。こうして有能な警官像が打ち出されることによって、読者の興味は犯罪者に対する共感から、追跡者のカタルシスへと統合され、ニューゲイト・ノヴェルは、「罪と罰の物語」から「犯罪捜査の物語」、すなわち探偵小説へと変化を遂げるのである。

\* 本稿は、平成14年3月4日に学位を授与された広島大学課程博士号学位論文「探偵小説とディケンズ——反探偵小説『エドウィン・ドルードの謎』をめぐって」の一部を圧縮、加筆修正を施したものである。

## 註

<sup>1</sup> むろん、この背景には犯罪に対するディケンズの関心の高さがある。ディケンズの作品群で、殺人が決定的、もしくは付随的な役割、を果たしているものを並べ挙げればきりが無い。『オリヴァー・トゥイスト』（1837-39年）、『ニコラス・ニッケルビー』（1838-39年）、『バーナビー・ラッジ』（1841年）、『マーティン・チャズルウィット』（1843-44年）、『荒涼館』（1852-53年）、『大いなる遺産』（1855-57年）、『リトル・ドリット』（1859年）、『互いの友』（1860-61年）、『二都物語』（1864-65年）、『エドウィン・ドルードの謎』（1870年）、さらには「追いつめられて」などの短篇である。オールティックの言葉を借りれば、「ヴィクトリア朝の小説家の中で、ディケンズほどしばしば人の心に宿る殺人性癖を扱った者はいない」（Altick 104）。

<sup>2</sup> テキストは、Everyman Dickens 版の *Oliver Twist* (London: Dent, 1994) を使用。括弧内で頁数を示す。これ以後もディケンズ作品に関しては、Everyman Dickens を使用。作品名と頁数のみを記す。

<sup>3</sup> いわゆるスコットランド・ヤード、首都警察が誕生したのは1829年であるが、それ以前にも犯罪取り締まりをする機構が存在しなかった訳ではない。18世紀半ばにウェストミンスター地区の治安判事となったヘンリー・フィールディングによって組織されたボウストリート・ラーナーズ（本部がボウ街にあったことから、こう呼ばれた）は、その後を受け継いだ判事たちによって取り締まり区域をケント、エセックスへと拡大していった（Paroissen 202）。

## 参考文献

Altick, Richard D. *Victorian Studies in Scarlet*. New York: Norton, 1970.

Benjamin, Walter. *Illuminations: Essays and Reflection*. Trans. Harry Zohn. New York: Schocken, 1968.

---. *Reflections: Essays, Aphorism, Autobiographical Writings*. Trans. Edmund Jephcott. New York: Schocken, 1978.

Binyon, T. J. *Murder Will Out: The Detective in Fiction*. Oxford: Oxford UP, 1989.

Cawelti, John G. *Adventure, Mystery, and Romance: Formula Stories as Art and Popular Culture*. Chicago: U of Chicago P, 1976.

Dickens, Charles. "A Detective Party" *Household Words*. July 10 1850; 10 August 1850. *Household Words*. Vol. 1. 409-14, 457-60.

---. *Bleak House*. London: Dent, 1994.

---. "Hunted Down." Master Humphrey's clock and other stories. Everyman Dickens. London: Dent, 1997. 179-200.

---. "On Duty with Inspector Field." *Household Words*. 14 June. 1851. *Household Words*. Vol. 3.

26-70.

- . *The Adventures of Oliver Twist*. Everyman Dickens. London: Dent, 1994.
- . "Three Detective Anecdotes." *Household Words*. 15 September. 1851. *Household Words*. Vol. 3. 577-89.
- . "The Sign of Four." *The Complete Novel and Stories*. Vol. 1. New York: Bantam, 1986.
- Dubberke, Ray. "Dickens's Favorutie Detective." *The Dickensian* 444 (1998):45-49.
- Ginzburg, Carlo. "Clues: Roots of an Evidential Paradigm." *Clues, Myths, and the Historical Method*. Trans. John and Anne Tedeschi. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1992.
- Heycraft, Howard. *Murder for Pleasure: The Life and Times of the Detective Story*. New York: Carroll and Graf, 1984.
- Humpherys, Anne. "Who's Doing It? Fifteen Years of Work on Victorian Detective Fiction." *Dickens Studies Annual* 24 (1992); 259-74.
- Miller, D. A. *The Novel and the Police*. Berkely: U of Clifornia P, 1988.
- Murch, A. E. *The Development of the Detective Novel*, New York: Philosophical Library, 1958..
- Page, Norman, ed., *Wilkie Collins: The Critical Heritage*, London; Routledge and Kegan Paul, 1974.
- Paroissen, David. *The Companion to Oliver Twist*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1992.
- Poe, Edgar Allan. "Barnaby Rudge." *Essays and Reviews*. New York: The Library of America, 1984. 218-44.
- . "The Murders in the Rue Morgue." *Selected Tales*. Oxford: Oxford UP, 1998. 92-122.
- . "The Philosophy of Composition." *Essays and Reviews*. New York: The Library of America, 984. 13-25.
- Sedgwick, Thomas A. and Jean Umiker. *The Sign of Three: Dupin, Holmes, Peirce*. Bloomington: Indiana UP, 1988. 11-45.
- Stashower, Daniel. *Teller of Tales: the Life of Arthur Conan Doyle*. New York: Penguin 1999.
- Spengemann, William C. *The Forms of Autobiography: Episodes in the History of a Literary Genre*. New Heaven: Yale UP, 1980.
- Steig, Michael, and F. A. C. Wilson. "Hortense vs. Bucket: The Ambiguity of Order in *Bleak House*." *MLQ* 33 (1972): 289-98.
- Symons, Julian. *Bloody Murder from the Detective Story to the Crime Novel: A History*. New York: Penguin, 1974.
- Thomas, Ronald R. *Detective Fiction and the Rise of Forensic Science*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Taylot, Walton and Young. "The New Criminology" RKP, 1973.
- クラカウワー, ジークフリート. 『大衆の装飾』. 船戸満之, 野々村美紀子訳. 東京; 法政大学出版局, 1996.
- ブロッホ, エルンスト. 「探偵小説の哲学的考察」. 『異化』. 船戸満之他訳. 東京: 白水社, 1997. 41-64.